

令和3年度 学校評価計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢伏見高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果（後期）	成果と課題及び改善策
1 生徒があらゆる場で誠実さ・聡明さ・品位・心の豊かさを追求できるよう、教職員は安全で規律ある安心できる学校生活を日々実現する。	① 基本的な生活習慣の確立を図るため、遅刻を防止し、時間を守る指導を徹底する。	遅刻の延べ人数が前年度と比較して A：80%未満 B：90%未満 C：100%未満 D：100%以上	達成度 A 4月～12月 57.4% 昨年度 79.3%	昨年度6月始業であったことや遅刻基準の見直しなどで昨年との比較は難しいが、12月までの経年比較として42.6%減少という結果が得られた。生徒一人一人の時間を守るという意識が高くなってきており、遅刻が常習化していた生徒も生活習慣の改善が見られ遅刻者が大幅に減少した。一方で悪天候の日は依然として遅刻者が増えるため、継続して遅刻防止に向けての取り組みを行ってきたい。(参考)後期学校評価アンケート(生徒)では、「授業や学校行事に参加する際は時間を守って行動している」という質問に、肯定的に答えた生徒は96.5であった。
	② 自発的な挨拶、正しい言葉遣いなどを身につけ品位のある人間性を養う。	自ら進んで挨拶できる生徒の割合が A：90%以上 B：85%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 C 12月学校評価アンケート(生徒) 81.4% 昨年度 D 78.5%	毎日の登校指導の中で、教師から粘り強く挨拶をすることで少しずつ挨拶への意識は高まっている。中間評価で3年生が最も悪かったが、学年の差が見られなくなったばかりか、反対にブラッシュ・アップ指導など進路実現に向けた指導の効果もあり、3年生が自ら進んで挨拶をするかという質問に対して「よくあてはまる」と回答した生徒が4割近くになり他の学年を大きく上回った(1、2年とも3割程度である)。挨拶を強制するのではなく、自ら挨拶をしようという意識をさらに醸成していきたい。
	③ いじめ防止に関する講話や教員対象の研修会などにより、生徒・教員ともにいじめに関する認識の向上を図り、いじめの起こらない雰囲気をつくる。	本校の「いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめやネットトラブルの未然防止に学校全体で組織的に取り組んでいると回答する教職員の割合が A：100% B：90%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート(教員) 100.0% 昨年度 B 94.0%	「いじめはどこにでもある」という認識の下で、担任がアンテナを高くして生徒を観察し、生徒指導課を中心に保健室、相談室、学年主任との組織的な情報収集・交換を行うことにより、小さな芽のうちに摘み取り未然に解決できている。ただし、ネットトラブルについては見えない部分も多く、外部機関とも連携しながら未然防止に努めたい。
	④ 学校生活の中で、環境保全に対する生徒の意識を高め、実践する。	ゴミの分別、教室やトイレの消灯、校内の環境保全活動に積極的に取り組んでいる生徒の割合が A：90%以上 B：85%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート(生徒) 90.8% 昨年度 B 88.0%	ゴミの分別などに関して意識は高く、購買で販売する商品のゴミなどは特別な仕分けが必要だがよくできている。一方で、移動教室の際などの電気の消し忘れが多く、引き続き環境教育を継続して進めていきたい。
学校関係者評価委員会の評価	昨年度と比較して遅刻の減少や生徒の時間を守ることへの意識が伸びていることは素晴らしい。しかし、遅刻常習者への働きかけや自発的に挨拶する方法について検討する必要がある。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	自ら進んで挨拶できる生徒が増えるように、学校生活のどのような場面で生徒の意識向上につながる働きかけが可能か、検討し実行していく。			
2 生徒が学習意欲を高め主体的に学ぶ態度と方法を体得できるよう、教職員は深い学びの実現に向けて授業改善を重ね、評価の研究を進める。	① 不断の授業改善の実現に向けて、教科を超えて学び合う互見授業や研究授業を実施することにより、教員の資質を向上させ、生徒の学習意欲向上を図る。	(生徒)本校の教員は、生徒が主体的・対話的で深く学習できる授業を行っているという回答する生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 (教員)生徒の学びが主体的・対話的で深いものとなるような授業手法を取り入れていると回答する教員の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート(生徒) 88.9% 達成度 A 12月学校評価アンケート(教員) 87.6% 昨年度 (生徒) A 90.5% (教員) A 88.0%	多忙化の中、GIGAスクール構想に基づく研修が始まり、多くの教員はGoogle Classroomの使い方をマスターしようと取り組んだ。その分、学びの深まりの追求が後手に回ってしまった所がある。今後は、Google Classroomを使いこなしながら、主体的対話的な深い学びを展開できるように互見授業等を推進し、授業力の更なる向上に努めたい。
	② 低学年からの進路指導を意識して、学習時間調査や面談を活かし、生徒が見通しを持って家庭学習に取り組む態度を育て、学習習慣の定着を図る。	1日平均2時間以上、家庭で学習している生徒の割合が A：70%以上 B：60%以上 C：50%以上 D：50%未満	達成度 B 1日2時間以上の生徒割合 1中 1期 2中 2期 1年 26 50 53 41 2年 58 65 55 56 3年 70 79 80 83 全体 52 65 63 61 単位%	全体としては1日平均2時間以上、家庭学習している生徒の割合が60%以上となっているが、3年生が健闘しているためであり、時に1年生の家庭学習時間不足が深刻である。毎日の家庭学習時間状況を担任は把握し、学習時間にムラがある生徒や不足している生徒に対し速やかに面談を行い、学習する目標を見出し主体的に学習に取り組むことが出来るよう助言や支援を行っていく。また、授業で完結するような授業展開だけでなく、家庭学習までつながるような授業を工夫していきたい。
学校関係者評価委員会の評価	学習が作業にならない能動的な学びや、学びに意義が感じられるような効果的かつ継続的な指導を検討したらどうか。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	タブレット端末が一人1台支給される次年度は、これを利用した新たな深い学びの方法について検討していく。			
3 生徒がより高い進路目標を掲げその実現に向けて邁進できるよう、教職員は総力を挙げて生徒一人一人の進路実現を支援する。	① ホーム担任等との面談を繰り返し、生徒が将来を見据えてより高い進路目標を設定できるようにするとともに、生徒の進路実現に向けて、全教職員でサポートする体制を整える。	担任との個人面談や進路ガイダンスにより、志望する進路先を明確にすることができた生徒の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート(生徒) 91.7% 昨年度 C 76.4%	各担任のこまめな面談を実施しており、良好な人間関係が保たれている。「より高みを目指した進路実現の達成」という目標を全教員が共有して指導に当たった成果である。2年生は夏、冬と希望者による学習会を学校を離れた場所で実施したが、参加希望者も増え、進路実現への意識づけのためには効果はあった。
	② 地元で活躍できる人材の育成を図るため、地元県内大学を第一志望とする生徒と保護者に対し、年度当初より進路説明会を実施し、合格に向けての個別の取り組み(平日補習、土曜補習等)を行う。	地元大学の第一志望の上級学校等に合格・内定した生徒の合格率と、(地元大学) A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満 9月時点で国公立大学を志望した生徒のうち推薦・一般入試を受験した生徒の割合が(国公立大学の志望) A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	達成度 B 地元大学第一志望合格率 78.2% 達成度 A 国公立受験割合 80.8% 昨年度 達成度 C 地元大学第一志望合格率 63.0% 達成度 C 国公立受験割合 62.5%	9月の進路希望調査で第一志望に挙げていた大学等に合格した生徒は147名中115名で、78.2%であった。4年制大学では多くの生徒が第一志望とする金沢星稜大学、金沢工業大学への合格者が昨年度より増えた。文科省による大学への定員厳格化で難化していた入試も落ち着き、18歳人口の減少もあり、県内の私立大学も易化したことも要因に挙げられるが、生徒がⅡ期募集まで、諦めずに粘り強くチャレンジした結果である。来年度も、2月後半～3月上旬のⅡ期募集まで指導していくことを念頭に受験スケジュールを練っておく必要がある。9月の時点で国公立大学を志望していた26名のうち、実際に受験した生徒は21名であった。学校推薦型選抜には13名が受験し7名が合格。前期日程では10名中2名が合格し、後期では3名中合格者なしという結果となった。一般前期で受験する生徒が例年より少なかったが、推薦では自分の実績や関係する学問内容について語れるようになる生徒が昨年度より多かった。低学年からの進路指導を強化したい。
学校関係者評価委員会の評価	進路志望先を明確にできたという生徒が大きく増えたのは先生方の努力の証であると思われる。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	現状に満足することなく、低学年からの指導を充実させ、より高い目標に向かってチャレンジしていく生徒を全職員で育成していく。			

4	生徒が生徒会活動・部活動・学校内外の行事・体験活動を積極的にいき成長できるよう、教職員は主体性を引き出す働きかけに努める。	① 部活動の加入率を高めて、学校全体の活性化を図る。また、生徒のバランスのとれた生活や成長に配慮しながら、部活動が適切に行われているか検証する。	部活動に登録した生徒の延べ人数が全生徒の A：90%以上 B：85%以上 C：80%以上 D：80%未満	達成度 C 1年 98.3% 2年 83.3% 3年 62.1% 全体 80.5%	3年生の加入率が低くなっているのは、昨年度、新型コロナウイルスの影響でほとんど部活動ができなかったことが原因と考えられる。3年生を除くと加入率は90%を超えている。例年学年が進むに連れて、加入率が下がる傾向があるので、3年間継続して活動できるよう、活動内容の工夫や環境づくりに取り組んでいきたい。
		② ボランティア活動後の振り返りを充実させ、自己の成長を実感させることで、ボランティア活動に積極的に参加する意識を一層高める。	部活動が学校生活を活力あるものにしていてる生徒の割合が加入者の A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 C 12月学校評価アンケート(生徒) 79.9% 昨年度 C 74.8%	コロナ禍の中で、練習試合、合宿等が禁じられたり、部活動そのものが禁止されたり、今年も大変な年となったが、運動部では、インターハイ出場や北信越大会等に出場を決めたり、文化部では県最優秀賞や優良賞を受賞するなどそれぞれの部が頑張った1年であった。生徒の学業への負担、教師の時間外業務の負担軽減に向け、短時間集中の活動で生徒の満足度を上げる指導法を探りながら、部活動の抱える問題を時間をかけて解決を図りたい。
			ボランティア活動が学校生活の充実につながると回答する生徒が参加生徒の A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 C 12月学校評価アンケート(生徒) 70.7% 昨年度 データなし	コロナ禍の中、サマーボランティアは実施できなかったが、学校周辺美化を目的とした泥上げには多くの生徒が参加した。今後は生徒会が米泉校下町会連合会と除雪ボランティアの協定書を締結したので、部活動なども協力・参加して地域社会に貢献する気持ちを育てていきたい。4人に一人が、強くボランティアに積極的に参加したいと考えており、このような生徒の気持ちを発揮できる場を設定していきたい。
学校関係者評価委員会の評価		学習以外の活動についてはコロナ禍で仕方がない結果であると思われる。部加入率という指標については検討する時期に来ているのではないか。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		部活動の加入や運営などについて1年かけて検討していく。			
5	教職員は1～4の実現のため、より効率的かつ効果的な業務遂行を図り、組織的な業務改善策を提案する。	① 教職員が担当業務に応じてタイムマネジメントの意識を高め、分掌業務の効率化を図ることにより、勤務時間外の分掌業務を削減する。	(全教員)業務の効率化やタイムマネジメントの意識が高まったと考える教員の割合が、 A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	達成度 C 12月学校評価アンケート(教員) 64.6% 昨年度 B 76.0%	昨年度は、GIGAスクール構想に伴う研修、新学習指導要領に基づく教育課程や観点別学習評価の準備等、業務量が増加した。これらの業務に関してタイムマネジメントの意識を一層高め、業務の効率化を図れるよう働き方を更に見直し、望ましいワークライフバランスの実現に向けて取り組んでいきたい。
		② (各課・学年主任)主任を務める校務分掌において、業務の割り振りや効率化を図ることについて、 A：積極的に取り組んでいる。 B：取り組んでいる。 C：あまり取り組んでいない。 D：取り組んでいない。	達成度 B 12月学校評価(各課長6・学年主任3) 89% (内訳A 4人 B 5人)		主任または課長が全員AもしくはBという評価としたが、平均の時間外勤務時間は12月までの平均で、昨年度43時間に対し、今年35時間と減少した(6月～12月の比較。昨年は6月始業で同じように比較するため)。教員全体で勤務時間の削減意識の向上はもちろんだが、会議や行事等の精選にも取り組んでいきたい。参考ではあるが、本年度のひと月当たりの超過勤務時間が80時間を超えた教師が5人いたが、そのうちの4人は4月であった。年度当初の業務については特に過重にならないよう工夫をしたい。
学校関係者評価委員会の評価		新カリキュラムが始まる準備や指導法や評価法が大きく変わる中で仕方がない所もある。時間の掌握よりも先生方の受け止め方が大切である。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		生徒一人ひとりへの熱心な指導と効率的な働き方の両立に向けて、重要度や緊急度の低い業務や会議を精選し、ペーパーレス会議の運用など更なる業務改善に努め、生徒と向き合う時間の確保していく。			
6	教職員は、担当する教育活動の成果等について、保護者や地域に対し迅速かつわかりやすく学校HPや印刷物等を活用して報告する。	① 学校ホームページをより閲覧しやすいように工夫し、保護者や地域、中学生やその保護者等への情報提供を一層充実させる。緊急連絡は、ホームページでも発信できるようにする。	学校ホームページによって、本校の教育活動についての必要な情報を知ることができると回答した保護者等の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	達成度 A 12月学校評価アンケート(保護者) 91.2% アンケート内容を昨年度と変更したため、経年比較はできない。	ホームページの体裁も必要な情報を提供に加えて見やすくも追求し、少しずつ改善に取り組んだ。配信メールではコロナ関係の重要情報を数多く配信することになった。良い評価を頂いてはいるが、保護者の配信メール登録者数が約85%であり、次年度はこの登録者数を増やすことを課題として取り組みたい。
学校関係者評価委員会の評価		保護者はホームページや配信メールにより情報を得ており、よりタイムリーに掲載、発信してほしい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策		ホームページのなご一層の充実を図るとともに、中学生が教室の掲示からも多くの情報を得ていたとのご意見を踏まえ、紙ベースの情報発信にも努めていく。			